

株式会社湯ノ沢間欠泉「湯の華」が飯豊町広河原字湯ノ沢に宿泊施設を新築開業したのは、昨秋2005年10月8日の事である。湯ノ沢は山形県の南端で福島県との県境、標高は約830mである。安土桃山時代に当地で金の採掘が始まり、その坑内で古くからお湯が湧き出したとされ、炭鉱夫に親しまれた歴史のある秘湯である。とはいえ、地理的には現在でも国道113号飯豊町手ノ子から約1時間、距離にして約30km離れた山奥の秘湯中の秘湯である。山形県の母なる川、最上川の源流のひとつである置賜白川の上流に出来た白川ダムのさらに上流部にあたる。

浴室入口に掲示した明治末期か大正初期のあばら家風の広河原温泉の写真と、古い分析書（明治43年に当時の南置賜郡中津川村大字廣河原の高橋運蔵氏が分析を依頼したもの）が、歴史の古さを物語っている。

1998年には関東学院大学地球物理学研究室の調査により、日本でもまれな炭酸ガスで噴き出し、しかも噴き出す源泉に湯船を設けて、間欠泉を目の当たりにしながら浴びることができる秘湯ということが注目されるようになった。常には10分か20分のインターバルで2～3m噴き出し、温度は35.1度、体温よりやや低めで肌には柔らかく感じるそのユニークさは得がたいものがある。露天風呂の中で噴き上がる飛沫を全身に浴びていると、ただただ顔がほころんでくる。至福のオフタイムをお客さまに堪能していただいているとひそかに自負しているのだが、本当のところは地球のゴキゲンしだいである。

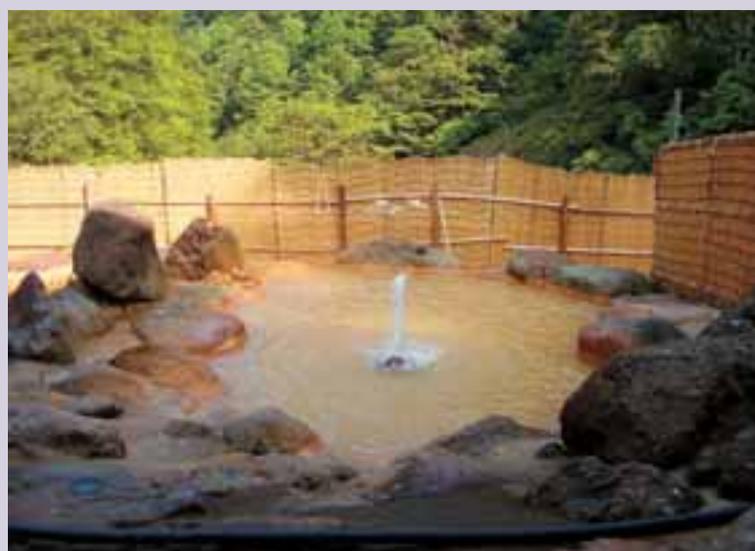
今年は大雪で、除雪機械3台で数百時間もかけて開通に頑張ったものの、4月の気温が上がらずに雪が思うように消えてくれなかった。残雪が路上の斜

面に張り付き雪崩の恐れがあり、5月の連休にオープンを間に合わせるのは無理だった。西日本では大雨が猛威をふるったというニュースが流れていたが、東北は雨の少ない今年の水無月。どれも皆、人間のさたの及びもつかぬ地球のおぼしめしと受け止めるしかなさそうだ。湯ノ沢間欠泉「湯の華」だって、地球の気まぐれな贈り物なのか、高く高く噴き出すのはいつなのかワカラナイ。YTSテレビ2005年やまがたふるさとCM大賞の「♪噴き出すわっ〜♪」、間欠泉のイメージと飯豊町の“ばっちゃ”長谷川きよさんが365日毎日1回はテレビに流れている。飯豊

## バリューサイト VALUE SIGHT

# 民活による地元資源の活用 息吹よみがえる山峡の秘湯 湯ノ沢間欠泉「湯の華」

人口約400人、高齢化率は48%を超え、急激に過疎化が進む飯豊町中津川地区。そこでは、地域の火を絶やさないために、行政頼みばかりではなく「出来ることは地域で」行う住民たちの、衆知を集めた活動が展開されている。



10～20分に一度吹き上がる間欠泉。時には5mを超えて噴出する。

町の若者たちが斬新な感覚でつくった作品で、審査にあたった広告制作のプロを唸らせたという出来栄である。

広河原温泉について振り返る時、地元中津川の財産区を中心とした多くの先輩たちの努力を忘れてはならない。足腰の痛みや疲れ取りに良いお湯、飲んで胃の悪いのに効き目がある湯だからと、道路もない時代に東沢の流れをさかのぼって資材を運び湯治場を建て、当時の須貝一郎飯豊町長が地元民の期待に応えるべく、国有林地への林道敷設を率先して陳情されてから50余年になる。

1967年の羽越水害で建屋も道もすべて流出し土砂に埋もれ、通う人もなくなった

時代を経て、今また、地元を中心とした出資による株式会社として、新たな出発に向かう我々である。

山峡の、いわば辺境とも言うべき地にしかるべき建物を建てて経営することは、言うまでもなく厳しい条件下にある。中津川財産区としても飯豊町に積極的に助力を仰いだが、中津川にはすでに第3セクターの「白川荘」や「ホテルフォレスト」などの観光宿泊施設があり、これらの既存施設と競合する懸念があることや、町財政の切迫などから町では協力できないとの判断がなされた。それでは民活による開発しないと財産区管理委員会を中心に株式会社

## 置賜



株式会社湯ノ沢間欠泉  
「湯の華」  
代表取締役

鈴木 良則

設立の呼びかけに動いた。同時に、施設建設の賛否について住民アンケートをとったところ、中津川地域住民の80%以上の賛同が得られたのである。

中津川にも、かつては貴金属製造、弱電基盤組み立て、自動車のシート縫製などの下請け工場があったが、景気変動で他の地区に移ったりして現在は無い。今はマイカーの時代であり、勤め人は近くても20<sup>分</sup>、普通40<sup>分</sup>離れた職場に通勤している。若い世代でも地元に残って通勤している者は少なくないが、いざ結婚となると、所帯を持つのは町の中心部か近隣市町になる。冬の降雪時の困難さ、家の周りの除雪にかかわる時間、金銭的・体力的負担など、ことさら理由にするまでもない苦渋の選択だろうと思う。「えがったなあ」と慶事を心から祝う気持ちに偽りはないが、一方「当たりまえ」「しかたがない」「ほど

ごでええ〜」と肯定しながらも、いささかの不安が頭をよぎる。中津川児童館は昨年からは休止、中津川小中学校は小学生・中学生共に新入生がなく今年は入学式ができなかった。中津川に子どもがいなくて地区は存続できない。待ったなしの事態である。

しかし、若者たちが作り出した中津川真夏の雪の祭典「SNOWえっぐフェスティバル」が、すでに16回を数えることに象徴されるように、中津川地区には地域づくりの長い積み重ねがある。私が若い時代は“若いもん”が「住み郷（住みよい郷土を創る会）」で、“あんちゃんだ（目上の方たち）」は「上流協（白川上流地域再開協議会）」を結成して、常に中津川の将来について語り合い、ある時は行政に陳情などをしてきた。これらの活動を、現在は「中津川むらづくり協議会」が引き継いでおり、株式会社への出資を募る際も、協議会メンバーの協力によってスムーズに運ぶことができた。

湯ノ沢間欠泉「湯の華」の建物は飯豊産の木材をふんだんに使った大正レトロ風の雰囲気、男女内風呂は源泉2号を加温してかけ流し100%。間欠泉は露天混浴。2階客室は10畳間が6室、定員30名、1階に食堂兼休憩所35畳の施設。深山の中の湯宿ながら手数を必要とするところは人の手をかけ、質の良い接客を目指す一方で、電気は自家発電で賄い、電話回線は無く衛星電話が頼り、テレビはNHKのBS衛星放送が見られるだけである。

雪が降れば営業はかなわず、春は春で、今年のように大雪でなくともいくつもの課題が生じる。しかし、かつて飯豊町議員や中津川財産区管理委員長をされた故伊藤良平氏から「君子は義に喻り、小人は利に喻る」と教えられた。現実的には経済最優先の毎日ではあるが、「道を明らかにして義を正し、功利を謀るな」と、心して進んで行かなければと歯を噛み締めてみる。「山中の賊を破るは易く、心中の賊を破るは難し」

### ■ 鈴木 良則（すずき・よしのり）

1948年山形県西置賜郡飯豊町大字白川に生まれる。  
現在、中津川財産区管理委員会委員長・中津川むらづくり協議会会長、飯豊町社会福祉協議会理事・西置賜ふるさと森林組合理事。  
広河原湯ノ沢間欠泉「湯の華」  
〒999-0422 山形県飯豊町大字広河原字湯の沢448-2  
TEL 0238-78-0045・FAX 0238-78-0046  
ホームページ：http://lavo.jp/yunohana/  
E-mail：yunohana@jade.plala.or.jp